

高峰登山におけるビバークの実際

重 廣 恒 夫

1. ビバークとは

ビバークとは行動中に荒天に遭遇してその後の行動の継続が難しくなったときや、何らかの理由で目的地に到着する前に行動不能になり、その後の行動を中止して屋外で夜を迎え再び行動できるまで過ごす、というのが一般的な定義である。

一昔前には着衣や装備の質が不十分で、ビバークしなければならない状況に置かれることは、凍傷や凍死という最悪の状態を招く場合も多かったが、軽量で凍りにくいナイロン製のヤッケや羽毛製品が、ヨーロッパから輸入されるようになって悪条件下でも比較的安全に夜を過ごすことができるようになった。

特に長大なヨーロッパアルプスを登るためには、好むと好まざるとにかかわらず岩壁の途中でのビバークを余儀なくされることが多かった。

そして、最近ではさらなる装備の発達とともにスピーディーな登山を行うためには、少し位の不自由・不快感は我慢して、重く嵩張るテントやシュラフザックを携行せず、軽量化による速攻登山が試みられ、その場合には積極的なビバークが採用されている。

しかし、装備・食糧の軽量化による速攻登山は短期間で頂上への到達を可能にしたが、運悪く行動することのできない悪天に遭遇した場合、食糧や体力の損耗をきたし、最悪の事態を招く危険をはらんでいるのも事実でもある。

このようにビバークには、予測しない事態の発生によって余儀なくされるビバークと、あらかじめ予定をたてて万全の態勢でのぞむ計画的なビバークとがある。前者はフォーストビバーク（不時露営）と呼ばれ、後者はフォカストビバークと呼ばれている。予定されたビバークは、装備の高機能化、食糧や炊事用具の軽量化や簡便化により、最近では比較的安全に夜を過ごすことができる時代になったと思う。従って、ここでは行動中に何らかの理由で余儀なくされるフォーストビバークについて述べてみたい。

2. フォーストビバークの実際

高峰登山においてフォーストビバークをしなければならないのは、たまにキャンプ間の荷揚げなどで不意の悪天候によりルートを見失ってビバークする羽目に陥る場合を除いて、そのほとんどは最終アタック時にルートの難しさや不調者がでて、予定ど通りに行程がはかどらなかつたり、急激な天候の変化で行動不能に陥った場合である。

最終アタックに際しては、たとえ好天が予想されても、ザックの中にはパーティとしてはツエルト

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

を入れて行くことが常識であるし、隊員一人一人もシュラフカバーかレスキューシートなどの体を風から守ることのできる物をザックの底にしのばしておくべきである。

運悪くビバークをしなければならぬ状況になった場合は、切羽詰まってからではなく、なるべく回りの状況が判断できるうちに『風のあたらない場所』『腰を降ろせる所』『落石や雪崩・スノーシャワーなどの通過しない所』に場所を定める。

そして、どんなに広い場所でも必ずアンカーを取っておく。それからツェルトがあればそれを被ることになるが、不意の風に飛ばされないように十分なアンカーをツェルトにも取ることを忘れてはならない。アンカーを取っていないツェルトに入っていると、一瞬の風でいとも簡単に奈落の底に突き落とされてしまうし、そうならないまでも風をはらんだツェルトに翻弄され、中の装備やなげなしの食料が散逸するもとなる。

ツェルトを用意していない場合は、風を避けるために雪洞が掘れば鬼に金棒である。

雪洞はスコップの用意がなくても、ピッケルやヘルメット等で掘ることができるが、それはクレバスの中か吹きだまりがあった場合に限られ、ほとんどの場合、高所の雪面は堅くクラストして、人の入れるような大きな穴を掘ることは不可能に近い。その場合は、せめて腰を降ろすことのできるテラスをピッケルで削り出すことである。

とにかく風が直接身体に当たらないように、クレバスの中、岩陰、斜面のくぼみなどを探す。

そして、ザックの中に着られるものがあれば全部身に着けることで、たとえ行動中の衣類だけでも一晩位過ごせるし、過ごすことができる体力作りをしておくべきである。下半身と足先を暖かくすることが大事なので、できれば靴紐をゆるめるが、ツェルトのないビバークでは、せいぜい尻の下にザックやザイル等を敷き、なるべく寒気が体に直接伝わらない方法をとるしかない。

もちろんツェルトや食料、炊事用具がある場合は、早い時間に十分な水分の摂取をしておくべきである。特に炊事道具がある場合は、スープ類が効率良く身体を暖め、エネルギー補給の源になることを忘れてはならない。単に雪や氷を溶かした水やお湯より、堅くなったチョコレートや羊羹を溶かした飲料は、身も心も暖めて明日への希望を膨らませてくれる。

この時、自然に眠れる場合は無理に起きている必要はないが、寒さを感じていたのが急にマヒした状態になったり、寒気で目が覚めた場合はもう寝ないほうが賢明である。

我々の身体は、行動を停止するだけで皮膚温が数度下がり、なんらかの動作をすることがおっくうになり、その後体温の低下で意識が朦朧として『幻覚症状』が現れたり、さらには死に至ることがある。荒れ狂う吹きさらしの稜線で、ツェルト等の防護装備なしで夜を明かすことは、疲労の回復はもとより体力の極端な低下を招き、思考力も半減して、それが遭難へとつながってくる。ある程度ルートが識別できる場合は、荒天であれ少しくらいの強行軍は覚悟で退却すべきであろう。何らかの理由でそれができない時でも、気力を充実させ、無用な体力の消費を避けるように配慮しなければならぬ

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

い。

以上のことは、長い経験の積み重ねによって養われた判断力で臨機応変に行動できるものであり、リーダーの適切な判断と行動力が要求される。

3. 高所でのビバークを可能にするウェアリングとは

ビバーク装備に関しては、その携行はほとんど予定されたビバークの場合なのでここでは詳しく述べない。

高所では空気中の酸素濃度は地上の1/3にもなり、衰退現象により人間の行動能力は極端に低下してしまう。風速30mにも達する烈風の吹きすさぶ厳寒のルートをたどるとき、人間は自然の猛威のもつ力の巨大さの前に、自らの肉体がいかにちっぽけな存在であるかを、痛いほど認識させられる。厳しい環境の中で、常に生と死の間にありながら、それでも、より困難なルートから頂きを目指す。ある面では登山とは可能性への挑戦であり、限界能力追求のスポーツでもある。

基本は、あくまでも鍛え上げられた肉体と、その力を十分に発揮させる判断力と経験にあることは言うまでもない。それゆえに使用するウェアは、我々の肉体と苛酷な自然との間にある最もファンダメンタルアイテムとして、細心の注意を払って選択されるべきである。酸素が希薄で、激変する環境の中では、限られた装備のもとで目的とするルートを安全かつ快適にたどるために、十分な機能を持ち合わせたクロージングが必須となる。そして、それこそが極限環境に耐え、生還できる原動力となるのである。

高所でのウェアリングの場合、発汗対策と防寒対策の2つを怠りなく施す必要がある。行動時の発汗を如何に効率的に放出し、汗による体温の損失を防ぐかが要求される。

レイヤード（重ね着）は高所衣料の最高のシステムである。以下にそのシステムを記すが高度により、行動量によって取捨選択も必要である。

- | | |
|----------------|-------------|
| ①パンツ・アンダーウェア上下 | ウール |
| ②中間着上下（下層） | ポリエステルフリース |
| ③中間着上下（上層） | ダウンインナー |
| ④アウターシェル | ゴアテックス3レイヤー |

そして忘れてはならないのが、ウールの厚手の靴下と手袋である。

さらにたとえプラスチック製の登山靴であっても、オーバーシューズの採用はビバーク時に最大の恩恵をもたらすし、オーバーミトンには凍傷の不安を和らげてくれる。

4. 高所におけるビバーク例

1980年5月10日、8230mの最終キャンプを午前6時に出発した尾崎隊員と私は15時間の苦闘の後に、未踏の北壁からチョモランマの頂きに到達した。

8848mの写真で見覚えのあるジュラルミンボールに掴まったときには、既に時計は午後9時をまわ

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

り、今まさに地平線の彼方に太陽が沈まんとしていた。反対側のマカルーが一瞬残照に輝き、そして闇に没した。

雪稜をコンティニューアスで1ピッチ下り、露岩にハーケン1枚を埋めてさらに1ピッチ下る。辺りにはハーケンを打つ適当なリスもないので、アイスハンマーを岩の割れ目にさしこみ、まず尾崎を降ろす。ハンマーがグラグラ揺れて抜けそうなので、あわてて手で押さえる。次は小生の番である。スラブの上をアイゼンをきかせながらソロソロりと降りる。スリップすれば一瞬にして身体が虚空を飛んでしまうであろう。ヘッドランプの明かりの輪の中に、岩のピナクルに掛けた黄色のシュリングを見つける。ここは昼間、何本かのハーケンを打ち、アブミを使って突破した岩稜の上端にあたり、下降点として使うための目印に残しておいたものである。

しかし、午後5時に酸素が切れ、疲労困憊した我々の力ではもう複雑な岩稜を忠実に下ることは不可能である。もう真っすぐ下るしか手はない。まず尾崎が暗闇に身を投じる。長い時間が経ったような気がするが、尾崎を呼ぶ声は闇に吸い込まれて何の反応もない。ザイルを引っ張りながら下の状況を察知する。50mの懸垂下降で尾崎の待つ雪のテラスに着く。支点にするスノーバーも無いので、やむなく自分のピッケルを埋め支点とする。たった50cmしか埋まっていないので心配になり、もし支点が抜けた場合尾崎を引きずり込んでとはビレイを解き、心細いランプの明かりで足元を照らしながら下降する。

ほどなく空中懸垂となり、絶望感に襲われる。淡い光の中にあと2～3mのザイルの端が踊っている。そして絶対絶命と思った瞬間、ザイルの末端が手の中を滑り抜けると同時に雪の斜面にアイゼンが突き刺さった。私の手にはもうピッケルもハンマーも無い。尾崎の降りて来るのをただじっと待つだけである。空中をクルクル回りながら尾崎が降りてくる。最後まで手を離さないように大声でどなりながら2人が合流する。これで核心部は突破した安堵感に浸りながら、さらに1ピッチ下る。

しかし、今にも消えそうなランプの光では我々の生還できるルートも定かでなく、午前2時ビバークを決意する。尾崎のピッケルを借り、雪の斜面に小さな棚を削り腰を降ろす。しかし、この場所はルンゼの直下なので何度となくスノーシャワーに見舞われる。せっかく作ったビバークプラッツであるが、昨日登攀開始直前にルンゼからの大雪崩を見ているので、重い腰をあげて50m右に移動、再びピッケルをふるいテラスを作り、カメラしか入っていないザックの上に腰を降ろす。

9時以降交信していなかった前進基地にビバーク態勢に入った事を報告し、皆に無事を伝える。食べるものも無く、被るものも無い、着の身着のままのビバークである。しかし、風は時折頬を撫でるだけで、これだけでも幸運である。前進基地では我々を元気づけるために、無線機で呼びかけているが、答えるのがおっくうなのと電池の消耗を案じて早々にスイッチを切る。

迫りくる寒気を少しでも和らげるため、尾崎はアイゼンを履いたままの靴をガチャガチャと打ちつけ、私は1, 2, 3, 4と数を数え始めた。そして何度かウトウトした後、回りが白み始めるのが

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

わかった。午前7時である。強ばった身体を起こそうとするが、冷えきった身体はなかなか言うことを聞いてくれない。

約1時間程してやっとノロノロと立ち上がる。速くに太陽が顔を出した。凍った身体がほぐれるようである。ハーケンを打ち、懸垂下降の開始である。今日は希望へ向かっての第一歩である。そして最後のハーケンを打ち、尾崎を迎える。ザイルを抜く。しかし、ここでとんでもないことが起こってしまった。手繰り寄せたザイルは手の中を擦り抜けて、雪の斜面を滑り落ちてしまったのである。尾崎を残しザイルの回収に下る。ザイルが無ければ我々の生還もおぼつかない。しかし、天は我々に味方した。10m下の棚にかろうじて引っ掛かったザイルを回収し、今度は慎重にセットする。

もうハーケンもない。支点に使うものも無い。しかし、下るにつれて昨日の見覚えのある地形に遭遇し、ちょうどザイルの末端で、測ったように8500mの地点で最終キャンプに続くフィックスザイルに出会った。もうこれで生きて帰れる。

長い長い54ピッチの懸垂下降を終えて皆の待つ前進基地に降り立ったのは、日付けが替わり、12日の午前1時であった。さらに撤収作業の進むベースキャンプに戻ったのは、翌13日の午前0時30分であった。

幸運の4日間であった。そして最も苛酷な4日間であったことは、ビバーク後尾崎の記憶は3日間途切れたことで明白である。私たちにとって8600m地点でのビバークは幸運に支えられて、いま、まさにローソクの炎が消える寸前の状況からの生還でもあった。

そして我々が無事に帰還できたのは、日本の冬の岩壁の継続登攀時における苦しいビバークの体験の積み重ねと、生きようとする意志とが、結果として生命の存続をもたらしたものと考えている。

(日本山岳会員)